※本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。

挨　拶

就 任 挨 拶

副 会 長
淵　上　正　朗

皆さん，こんにちは。コマツの淵上でございます。私は10年ぐらい前にコマツで知財部長を４年間ほど務めたことがございまして，最後の2010年度にはJIPAの常務理事もやらせていただいたこともございます。ということで，ちらほらとなつかしいお顔もお見受けしますが，先ほどの会長のお話ではありませんが，記憶のお顔の背景はほとんど飲み屋かな，という感じもしております。先日，久しぶりに理事会にも出させていただきましたけれども，大変皆さん元気が良く和気あいあいで，かつ非常に活発な雰囲気だなと感心いたしました。

私どもの産業のお話をちょっとさせていただきますと，建設機械産業は，先ほど小川先生の御講演で出てきた「すり合わせ技術」の代表のような産業でございます。幸い当業界では未だ，エレクトロニクス業界における韓国メーカのような強力な競争相手が出現している，というほどの状況ではありません。比較的助かっている，とも言えますが，ただ先生の御講演の中で，横軸が研究開発費，縦軸が利益で，産業別にその相関を示すグラフがありましたが，建設機械と農業機械の分野では３年間研究開発費の伸び率がゼロの中で,利益だけが垂直に上昇しているというデータがありましたけれども，あれは1995年からの３年間の話でございまして，その後２年間で利益はもとに戻っておりますので，補足説明をさせていただきたいと思うんですが…。

さてたまたま今年，コマツはJIPAの知財経営のケーススタディーで取り上げられまして，私もインタビューに応じさせていただきました。それを読んでいただくとわかると思いますが，コマツにおいては知的財産が華々しく活躍しているという話はあまり出てきません。もちろん，いろいろと細かいところで貢献はしておりますし，知財部門が必須の部門であることは間違いありませんが，会社経営にとって決定的な役割を果たしているとまでは言えない，と感じております。

しかし，今まではどちらかというと先進国メーカ同士の細かいつばぜり合いといいますか，そういう感じの特許の出方も多かったわけですけれども，これからは小川先生のお話の趣旨のようなことが私どもの産業でも起こると思います。新興国，特に中国だろうと思いますが，それらの国との競争において知的財産がいよいよ出番になる，と感じます。知財活動を，「いい技術をいい特許にする」という狭い定義に捕らえると確かに不十分かなと思います。もっと発想を広げた何らかの形での知的財産で勝っていかない限り日本の産業は苦しくなっていく，ということが当然起こると思われます。ということで，知的財産に対する期待は非常に高まってきていると考えますので，JIPAの活動につきましても，私も微力ながらお役に立ちたいと思っております，よろしくお願い致します。どうもありがとうございました。